



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                     |                                                                                                                                                                                  |
|---------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title               | 食にかかわる成人学習の困難とその要因：食生活改善実践における学習支援者のジレンマに着目して                                                                                                                                    |
| Author(s)           | 八島, 絵美                                                                                                                                                                           |
| Description         | この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は <a href="https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/">https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/</a> をご参照ください。 |
| Degree Grantor      | 北海道大学                                                                                                                                                                            |
| Degree Name         | 博士(教育学)                                                                                                                                                                          |
| Dissertation Number | 甲第16807号                                                                                                                                                                         |
| Issue Date          | 2026-03-25                                                                                                                                                                       |
| DOI                 | <a href="https://doi.org/10.14943/doctoral.k16807">https://doi.org/10.14943/doctoral.k16807</a>                                                                                  |
| Doc URL             | <a href="https://hdl.handle.net/2115/99652">https://hdl.handle.net/2115/99652</a>                                                                                                |
| Type                | doctoral thesis                                                                                                                                                                  |
| File Information    | YASHIMA_Emi_abstract.pdf, 論文内容の要旨 <a href="https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/</a>                                        |



## 学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）

氏名：八島 絵美

### 学位論文題名

#### 食にかかわる成人学習の困難とその要因 ー食生活改善実践における学習支援者のジレンマに着目してー

本論文は、食生活改善実践を規定する歴史的・社会的・構造的な枠組みを検討し、成人学習における実践上の困難とその構造的な要因を解明することを目的とした。

日本の食生活改善実践および栄養教育の領域においては、栄養は国家奉仕にはじまり、その手段は意識啓発や科学的・合理的な知識の普及とされてきた。しかし、そこでは知識や技術習得の難しさが実践上の困難として指摘され、これへの解決策として、「自らの健康は自ら守る」ための「主体的」な行動変容が求められるようになった。その結果、行動科学や「PDCA」といった方法論への依拠が強まっていった。

このような、国家的要請や科学主義的傾向、PDCA サイクル等による標準化された管理・評価等々の諸要因（特徴）が、実践上の困難をもたらしていると考え、本論文では、これら諸要因の関連性や困難性の構造を明らかにすることを課題とした。

第1章では、食生活改善実践の現状とジレンマを分析するために、行政の管理栄養士とともに地域住民の食生活改善活動を行う食生活改善推進員にインタビューを行った。また、一般成人の食生活改善にかかわる意識については、統計資料等の結果を参考に整理した。推進員へのインタビューの結果、第一に主婦（女性）役割としての自覚と学習支援者としての自覚をめぐるジレンマを見出した。これは、食生活改善実践というものが、歴史的（構造的）にトップダウンの学習内容伝達型の啓蒙的な枠組みの中で成立してきたため、この構造が主婦としての経験や実践を現場では発揮できないというジレンマを生じさせていると考えた。第二に食生活管理者としての責任感とジェンダー視点の欠如をめぐるジレンマを見出した。推進員は、科学知を信じる食生活管理者としての責任感がある一方、調味料を正確に計量しない、助言を聞き入れないといった男性に対して強く注意できないというジレンマを生じている。他方、成人の意識調査では、成人は栄養バランスや栄養不足といった不安を抱いてはいるが、時間的余裕の無さから実践できない生活実態と、安全性に対して漠然とした不安を抱きつつも外食・中食等に頼ってしまうという現実の食生活に規定されている。このように、生活実態やそれに伴う意識が参加者と推進員とで異なっており、そこに推進員はジレンマを抱えている。

第2章では、ジレンマの諸要因の中でも基軸をなす科学主義の特徴とそれが実践を規定する論理を、管理栄養士・栄養士の養成カリキュラムに注目し分析した。その結果、第一に、健康は「国民の責務」という論理が、その政策が示される以前からすでに栄養士の中に胚胎していたことが明らかとなった。このような論理とそれをベースにした実践が、実践に向き合う管理栄養士・栄養士の苦悩を大きくし、むしろ科学的知識や技術の啓発を軸とした主体性喚起の方向性を強めていったと考えた。第二に、科学知や技術に偏重した養成カリキュラムは、その専門性を高めるにつれて、一方で社会的背景や住民のQOLに関する学修や視点を欠落させる恐れがあることを見出した。第三に、成人の食

生活の把握と評価に用いられる PDCA サイクルは、管理栄養士にとって健康＝病気がないことが目的になってしまうと考えた。以上より、管理栄養士・栄養士・推進員といった学習支援者と成人がそれぞれ目指す改善・実践計画との間には、科学と時間軸といったずれがあることが確認され、これが学習支援者が学習者に対して感じる困難になっていると考えた。

第3章では、食生活改善実践の困難性を解明するうえで、次に大きな要因と考えられるジェンダー問題を検討するために推進員のインタビューに再注目した。男性学の知見は、男性には「ケア」概念と「男らしさ」概念の二つが混合していること、男性の財力や権力を謳った近代化と家族賃金・稼得役割のような性別役割分業の融合が、分業意識を再生産していることを示している。ここから社会的・文化的背景により構築された男性の性別役割分業意識が、日常食は女性が担うべき私的領域という認識を高め、自身の健康問題と日常食との関連性を考える機会を蓋っていると考えた。また、女性側にも中川(2021)がDeluccieを参照しながら指摘するMaternal Gatekeeping行動がみられ、これが女性役割を再生産し、食や健康は女性が担うべき私的領域としてより強固な認識を男性にも女性にも植え付けていると考えた。以上より、食生活改善実践の困難性は、単一の要因ではなく複雑な諸要因により生じていることを確認した。それを構造化することで困難性の全体像を可視化することが可能となった。

第4章では、ここまでの章で分析してきた食生活改善実践の困難をもたらす要因の相互の関連構造を食生活改善実践の生成過程（歴史的展開）に即して検討した。その中でも特に女性（主婦）の改善実践に着目し、どのようにして栄養学が家庭内に導入されていたのかを分析した。戦争や米騒動などの国家的危機といった背景が、栄養学の確立を可能にし、その直接的な担い手が国家から家庭管理に置き換えられたことにより、その責任主体として女性が可視化されるようになったことが整理できた。また、食生活改善実践にかかわる栄養学は、都市部では生活改善運動や各種メディアを通して、農村部においては生活改善普及活動を通して浸透していったが、一方で、女性にとっての食生活改善実践は、国家的要請としてだけではなく、家族を守るケア精神と融合しつつも、封建的家族内に対する自立や抵抗のための武器ともなって、自ら引き受けてきた可能性があることがわかった。すなわち、「食は女性の役割」という性別役割分業を科学の力で再固定化した。このような文脈が、現在に至るまで女性がその責任を一人で背負い続ける構造を生み、そこで生じる食生活上のジレンマが現在では夫や男性との関係に焦点化されていったと考えられる。

第5章では、本論文の分析結果を踏まえ、食生活改善実践は今後どのように展開されるべきか、松下拡の健康学習を参考に新たな支援のあり方を検討した。松下によれば、主体は、集団やコミュニティといった協同による生活実態の「掘り起こし」の過程を通じて形成されるとする。本論文の課題に即せば、協同での実践は、家庭や地域におけるジェンダー構造のような社会的な問題を対象化し、客観的な共通課題として捉え直すことを可能にする。松下実践のプロセスにジェンダー視点を導入することは、食生活改善を単なる生物学的な課題から、自己の生き方や社会構造の問題へと解き放ち、健康問題解決のための指標を自ら設定できる主体形成に一層、貢献できる。

以上、本論文は、食生活改善という日常的な営みを、国家・科学・ジェンダーが交差する政治的な場として再定義したことで、成人学習における実践上の困難の構造を明らかにし、それを解消するための道筋を社会教育に見出した。